資料1

文化

千葉氏ゆかりいざ追跡

◇源頼朝に「父」と言わしめた豪族、全国にちらばる◇

鈴木佐





「鎌倉幕府がもしつくられなければ、その後の日本史は、二流の歴史だったろう」とは作家の司馬遼太郎の言葉だ。鎌倉幕府の成立は日本の歴史の中で転換点となる大きな出来事だが、その立役者である源頼朝をして「第二の父である」と言わしめた人物がいた。千葉常胤。千葉のまちを開いた豪族・千葉氏の中興の祖だ。

千葉氏は、平安から鎌倉時代の前期にかけて、源平合戦や奥州合戦などに参加し、鎌倉幕府の基盤確立に大きな役割を果たした。その功績によって下総国・上総国（現在の千葉県）を中心に、北は陸奥国の一部（東北）、南は薩摩国（鹿児島県）まで全国に広大な所領を有し、各地に子孫が移住した。

一時期、隆盛を誇った千葉氏だが、全国的にはもちろん、地元の千葉県でもその歴史はあまり知られていない。ゆえに全国に散らばった千葉氏の足跡をたどる私は「なぜ千葉氏にひかれたのか」とよく聞かれる。この質問に答えるには、まず私の育った環境について話す必要がある。

ルーツにたどりつく

実家のある千葉県香取市（旧小見川町）の良文地区では、ウリ科の植物「夕顔」の果実をひも状にむいて乾燥させたかんぴょうを食べないという変わった風習があった。幼心にこの風習を不思議に思い、探っていくと図らずも千葉氏のルーツにたどり着いたのだ。

千葉氏は桓武平氏の流れをくむ武家の名門だった。平安時代、武将の平良文（平将門の叔父）が死に臨むにあたり、息子に「我に会いたければ、我が塚に生えし夕顔の実を見つけ割ったところ、見事な観音像が出てきたという。夕顔観音と呼ばれ、これすなわち良文の変現であり、〝千葉氏の祖廟〟として伝承された結果、夕顔を食べなくなったという伝説である。

ささいな疑問をきっかけに千葉氏について調べるようになり、大学生になると県外に足を運び調査を進めた。最初に訪ねたのは岐阜県大和町（現・郡上市）。ここは常胤の六男、胤頼が東氏を名乗り、その子孫が分家して移って作り上げた。

町内を歩くと東氏が残した文化遺産、特に故郷千葉を意識した遺跡を発見した。当地を治める際に築いた城館「阿千葉城跡」や千葉からもたらされた明建（妙見）神社などだ。

各地に同志見つける

何よりの収穫は地元の自治体職員の知遇を得たことだった。大和町は1980年代後半から、東氏の歴史を伝承し、町おこしに結び付けようとしていた。ある職員に「将来、千葉氏ゆかりの市町村でサミットをやろう」と真剣なまなざしで言われたことを覚えている。

大学を卒業し、千葉県職員になったのも、行政マンとして自治体を超えた連携の橋渡しをしたいと考えたからだった。

常胤が戦功によって与えられたという肥前小城（佐賀県小城市）も訪れた。下総千葉氏は戦国末期に滅ぼされたため史料がとぼしい。そのため、江戸時代まで続いた肥前千葉氏の史料が研究には欠かせないのだ。

他にも福島県相馬地方、宮城県亘理町・涌谷町、岩手県一関市はじめ県南地域、青森県千和田市にも何度も行った。千葉氏が信仰していた「妙見菩薩」が各地で根付いていた事実や文化遺産を確認し、一族の末裔や自治体職員とも交流した。

「サミット」開催

調査によって築いたつながりは、千葉開府890年だった昨年8月、千葉市で開かれた「千葉氏サミット」で生かされた。千葉氏にゆかりの深い佐賀県や岐阜県など計11の自治体の関係者の招待に一役かったのだ。この時、サミット開催を待望した大和町職員の言葉が思い出され、万感胸に迫るものがあった。

歴史的には決してメインストリームを歩んだわけではない千葉氏だが、目立たないながらも優れた文化を残してきた。決して光のみならず影も伴ったはずだが、地域の発展に尽くしたことは疑いないだろう。9年後には開府900年を迎える。知られざる千葉氏に様々な角度から光をあて、地元のみならず全国に向けて情報を発信していきたい。（すずき・たすく＝千葉氏研究家）

第48回全国博物館大会において 新渡戸館長がパネリストと分科会講師をつとめました

11月9日～10日に仙台市民会館（宮城県仙台市）で開催された第48回全国博物館大会（日本博物館協会主催）シンポジウム「21世紀に相応しい博物館づくりを目指して」（9日）で当館新渡戸館長がパネリストの一人として、小規模館の現状やあるべき姿などについて意見を述べました。分科会Ⅰ「家庭・学校・地域とのつながり」（10日）では講師をつとめ、地域連携のあり方について意見を交わしました。また、大会の終りには「生涯学習の中核機関として“対話と連携”のキーワードのもと地域社会とのつながりを強めるとともに、博物館ネットワークづくりを進める」という決議が採択されました。



▲パネルディスカッションで意見を述べ合うパネリスト各氏。（右が新渡戸館長）



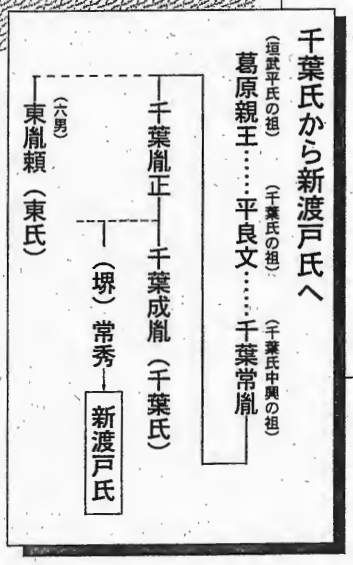
◀分科会Ⅰの様子

新渡戸氏ゆかりの地調査６

新渡戸氏の源流－千葉氏の足跡をたずねて

平成12年10月12日～13日調査





◀南部盛岡藩に提出した家系図では新渡戸氏の初代は常秀となっている。

新渡戸氏と千葉氏

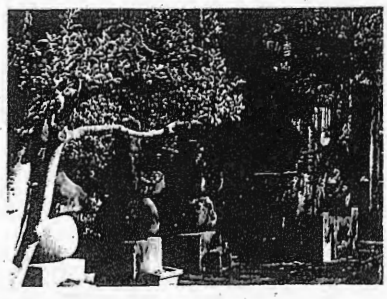
新渡戸氏は千葉氏から枝分かれした一族です。「新渡戸氏系譜」によると文治5年（1189年）奥州藤原泰衡（やすひら）との合戦に、千葉常胤は東海道（現・常盤道）軍の大将として一族を従えていました。この時下野国（しもつけのくに）「新渡戸」の駅で泰衡の刺客を常胤（つねたね）の孫・堺常秀が討ち、その功で下野国新渡戸、高岡、青谷の三郷をもらいました。そして5代後の貞綱は新渡戸の郷に居城し、姓を新渡戸と改めました。

千葉県内各地に残る千葉氏信仰の場

今回は千葉氏研究家・鈴木佐（たく）氏のご案内で、千葉県内各地に残る千葉氏ゆかりの神社仏閣を中心に回りました。

◆千葉氏の古い墓石が残る・大日寺（千葉市）

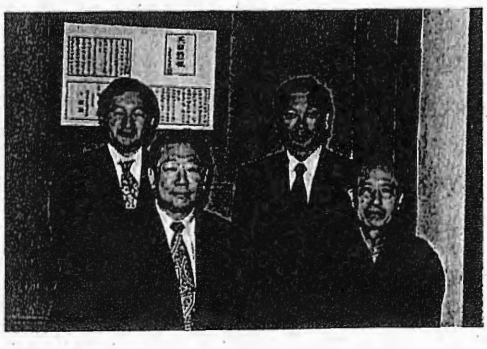
大日寺は千葉氏の菩提寺で、境内には鎌倉時代～室町時代にかけての五輪塔（16基）や多層塔などがまつられ、これらは千葉常兼から胤将にわたる千葉氏16代のものと伝えられています。墓に刻まれた銘文はほとんどが消えて判読できませんが、中には文安2年（1445年）の年号が刻まれているものもあります。また、この寺には新渡戸稲造も訪れ先祖をしのんでいます。



◀大日寺境内の千葉氏代々の墓所。大日寺は古く千葉神社南側にあったが、戦災により焼失し現在地に移された。

◆千葉氏の祈願寺・芝山仁王尊観音教寺（芝山町）

芝山仁王尊観音教寺は千葉氏の祈願寺で、寺所蔵の美しい十一面観音像（鎌倉時代初期）は千葉氏の姫君の姿を写したものと言い伝えられています。また、室町時代の千葉氏当主・胤直は嘉吉2年（1442年）結城合戦に勝った御礼と戦死者の供養のため、この寺に宝塔を建立しています。現在宝塔は残っていませんがその棟札が寺に残されています。



◀今回の調査では千葉氏研究家・鈴木佐氏（後列左）のご案内で、濱名徳永住職（前列右）にお話を伺う事ができました。

宮城県涌谷町発行「広報わくや」平成１２年１０月号

資料３

生涯学習コーナー

生涯学習課・涌谷公民館　43－3001　　箟岳公民館　45－2124

涌谷町の文化財案内　51

涌谷伊達家と千葉氏

江戸時代に、この涌谷の地を治めていた「涌谷伊達」家の先祖を遡ると、千葉介常胤という人になります。

この千葉氏は、桓武平氏の血を引き、現在の千葉県を中心として中世に活躍した豪族です。常胤は源頼朝に従って奥州藤原氏と戦い、奥州の土地をもらいます。その内、現在の亘理町を中心とした土地を三男である武石胤盛に分け与えました。

その後、亘理地方を中心に治めていた武石氏は、足利尊氏に仕えて「亘理」氏と姓を変え、さらに戦国時代になると伊達家に仕えるようになります。

そして、胤盛から数えて二十代目にあたる亘理元宗が、伊達政宗の岩出山への移動に伴って涌谷の地を治めることとなり、元宗から数えて三代目の定宗の時、伊達の姓を名乗ることが許されるのです。

涌谷には、この千葉氏との関係を示す資料が沢山あり、武石胤盛の位牌が光明院に、千葉介常胤が造立したと伝えられる如意輪観音が見龍寺に残されています。

また、妙見宮は千葉氏の守護神として妙見菩薩を祀っていた千葉県の妙見七社のうち第三社を移してきたものと言われ、涌谷伊達家の家紋である「月二九曜」も江戸時代に千葉へ使者を出して千葉氏の家紋を調査させたものとされています。

去る、九月九日から十日にかけて、涌谷と千葉のつながりを見学しようと、千葉県から千葉氏顕彰会の方々約五十人が涌谷を訪れました。妙見宮の祭礼に参加したり、涌谷町文化財保護委員長佐々木茂楨先生の説明のもと、千葉氏にまつわる文化財を熱心に見学していました。

今後、こうしたことを始めとして交流が盛んになることが望まれます。



見龍寺で、熱心に説明を受ける顕彰会の方々

千葉県多古町文化協会発行「多古文化」平成１８年１月20日

郷土史部

古都鎌倉に多古町ゆかりの地を訪ねて

郷土史の会では、平成十七年十月一日に町外研修会を行いました。「千葉胤顕彰会」事務局長の鈴木佐先生にご案内をいただいて、最初に訪れたのが、神奈川県立金沢文庫でした。文庫は同一敷地内かと思われるほど、称名寺と隣接していました。それもそのはず、両所共に、北条実時（一二二四～一二七六）によって創建されたもので、称名寺は亡き母の供養のため、文庫は収集した書籍を保存する目的で、寺の隣の自邸に建てられたといいます。

やがて、称名寺と文庫は併用されて、全国有数の、律宗僧侶の勉学の場となります。



称名寺庭園

そして、三代目の長老湛睿律師（一二七一～一三四六）が、同じ勉学の寺であった多古町寺作東禅寺の長老でもあったことから、称名寺と東禅寺では多くの手紙の交流が行なわれた。この手紙が金沢文庫に遺されて、現代になって解読され、千葉氏内紛時代に、多古町で行われた戦の物語り、史実として証明する。

文庫での説明後境内を散策すると、山懐に抱かれた伽藍、前の大きな池に架かる赤い橋、そのさきに建つ山門等、若し東禅寺が昔のまま、残っていたら、規模こそ違いこの姿であったであろうと感慨無量。

扇ヶ谷の岩船地蔵は観光者の溢れる八幡宮から、裏小路をしばらく歩いた住宅地の外れの一角にある。

木曽義仲の嫡子義高が、頼朝の許に人質となりやがて暗殺される。幼き日共に育った頼朝の娘大姫は亡き義高を慕って病没する。大姫の持仏堂とも墓ともいわれる小堂の前では、テレビドラマ義経の名場面を思い出させるひとときでした。

以上が若い人が溢れる小町通りをよそに一日歩いた一端です。



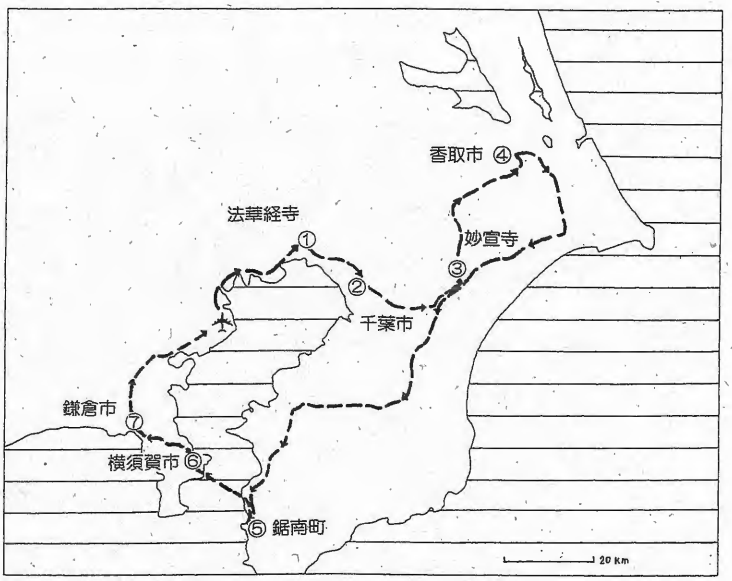
参加者

資料4

佐賀県小城市：小城郷土史研究会発行「小城の歴史」
平成二十五年九月三十日号

肥前千葉氏のルーツ・千葉県を訪ねて

太田　正和



小城郷土史研究会では、鈴木佐氏より「房総の美しき仏たち　仏像半島」展の会期中に千葉県来訪の呼びかけがあったことを受けて、千葉氏にゆかりのある史跡を中心に当会員六名が千葉県内や鎌倉を探訪することになりました。

平成二十五年六月十五日（土）～十七日（月）にかけて行ったこの探訪会では、仏像半島展の実行委員の一人であり、小城と関東千葉氏の橋渡し役でもある鈴木氏のご尽力によって、平成十五年の千葉探訪会では訪れることのできなかった場所も巡ることができ「見る・聞く」だけでなく「食」も満喫することができました。

この報告を書くにあたって行程を地図上で確認すると、その移動距離の長さに驚きました。道中、貴重な史跡の案内のみならず一人で車を運転して下さった鈴木氏にあらためてお礼申し上げます。

行　程

【一日目】
佐賀空港＝羽田空港
①市川市
中山法華経寺
（日蓮宗大本山　日蓮上人が最初に開いた寺）
②千葉市内
大日寺・来迎寺・宗胤寺
（肥前千葉氏先祖の墓所などを見学）
千葉城跡（別名・猪鼻城）
千葉市美術館「仏像半島」展
（大らかな野趣と洗練さを併せ持つ房総の仏像たちを閲覧）
懇親会
（千葉氏顕彰会会長・千葉滋胤氏や仏像半島展実行委員長・浜名徳順氏らと親睦を深める）
千葉市内泊

【二日目】
妙見本宮千葉神社
（千葉氏の守護神である妙見菩薩を本尊とする・国内の妙見信仰の中心とされる）
千葉山
（星宮塚墳墓群とも呼ばれ千葉氏累代の墓所と伝わる）


妙宣寺

③山武市
埴谷妙宣寺
（日親上人生誕地・産湯の井戸）
④香取市内
香取神宮
（下総国一の宮・千葉氏の信仰も強い）
圓通寺
（家康から下総国矢作五千石を拝領した鹿島藩初代藩主鍋島忠茂らの菩提寺）
伊能忠敬記念館
（九州の測量図には小城郡内の地名も多く記されていた）
佐原江戸時代町並み散策
（江戸時代に河岸問屋や醸造業など商家が軒を連ねる歴史的景観が残る町並み）
⑤鋸南町内泊
【三日目】
源頼朝上陸地
（伊豆で挙兵した頼朝が石橋山の戦いに敗れたのち、千葉氏など豪族を頼りこの地に上陸）
金谷港～フェリー～久里浜港
⑥横須賀市内
ペリー公園
（久里浜に上陸したペリーはフィルモア大統領の親書を幕府に渡した）


建長寺にて：建長寺派管長吉田正道氏（前列左から二人目）宗務総長高井正俊氏（前列右から二人目）に、ご案内していただきました。

記念艦三笠
（東郷平八郎が乗艦指揮する旗船で、日本海海戦において連合艦隊の勝利に貢献した戦艦）
⑦鎌倉市内
比企谷妙本寺
（比企の乱で知られる比企一族の邸宅跡に創建された・日蓮宗の本山・貫首の早水日秀氏は小城出身で金丸会員と同窓）
建長寺
（蘭渓道隆を開山とする日本最初の禅寺・小城円通寺とともに日本三興国禅寺の一つ）
妙高院
（小城円通寺四世　肯山聞悟の塔所）
羽田空港＝佐賀空港

＝参加者の声＝

常日頃日蓮宗の日親上人（鍋冠日親について調べていたので、誕生地埴谷妙宣寺訪問は望外のことだった。市川の中山法華経寺、鎌倉の比企谷妙本寺参詣もありがたいことであった。（岩松要輔）

千葉・鎌倉・小城のつながりは、縁深いすばらしいもので、小城郷土史研究会は小城という狭い地域にとどまらず、今後も広い視野から千葉氏の行動を歴史的に見つめていくためにも千葉氏顕彰会との交流を深め研究の幅を広げる必要があると思う。（金丸盛登）

本研修で、漠然としか認識していなかった「禅」と小城との関わりについて、身近に感じた。特に建長寺訪問は、普段は入れない場所まで見学し、「禅」が日本に導入され、それが小城とどう関わっているかが分かり、大きな収穫だった。（中尾久司）

千葉家の城郭に野辺、鹿島鍋島家との関わり、千葉にいたのに知らぬ事ばかり。渾身の企画、鈴木佐氏のご尽力に深謝します。（東統禅）

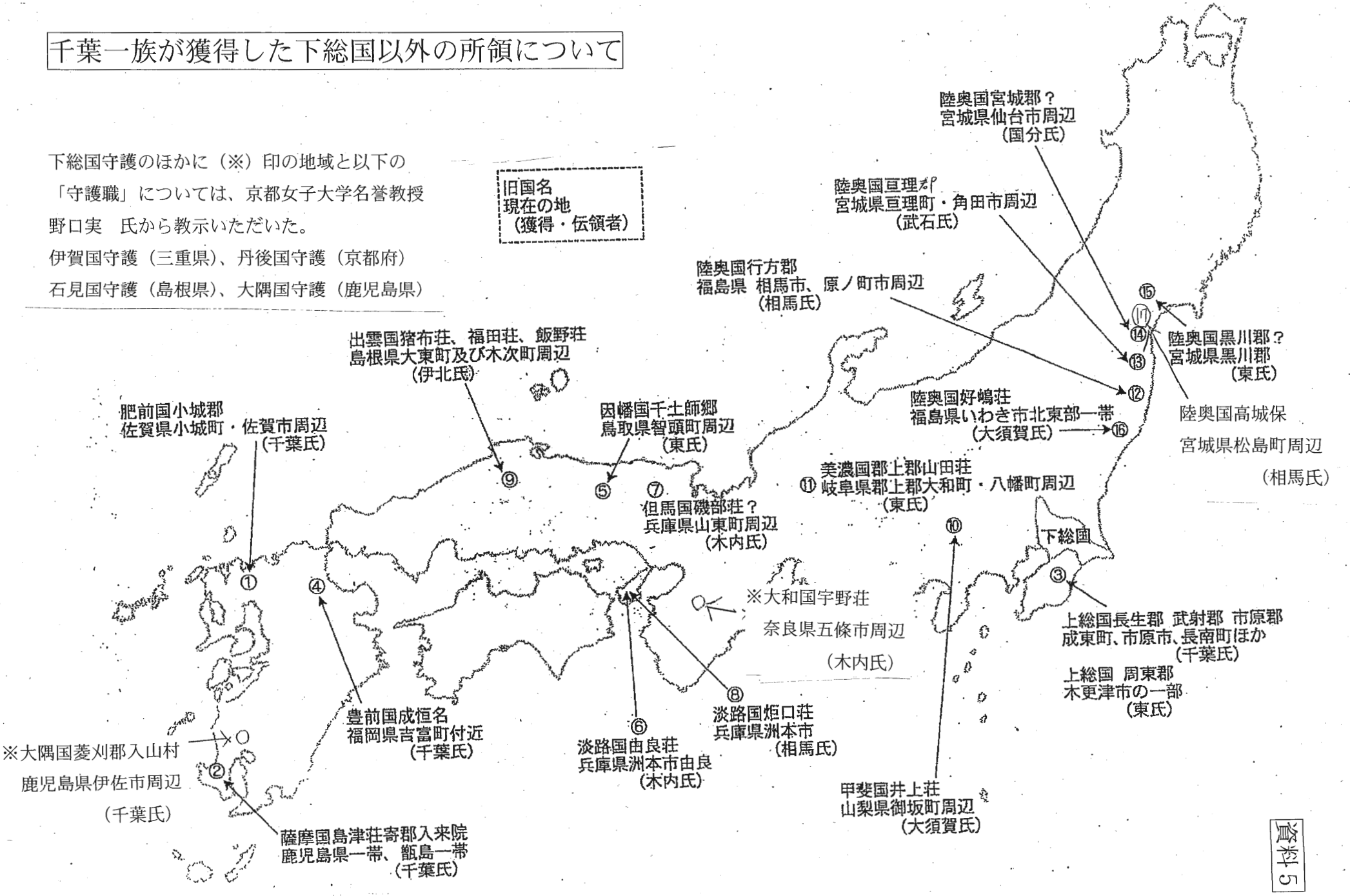
圓通寺の鍋島忠茂墓を守り継ぐ人々の想いを感じた。（田久保佳寛）

小城の歴史　第68号
発行　小城郷土史研究会（小城公民館内）
代表　岩松　要輔
編集　山口　政俊
田久保佳寛
太田　正和
発行日　平成二十五年九月三十日
印刷所　（株）音成印刷

千葉一族が獲得した下総国以外の所領について

下総国守護のほかに（※）印の地域と以下の「守護職」については、京都女子大学名誉教授 野口実　氏から教示いただいた。
伊賀国守護（三重県）、丹後国守護（京都府）
石見国守護（島根県）、大隅国守護（鹿児島県）

旧国名
現在の地
（獲得・伝領者）



資料5

21世紀に活躍する千葉一族

今までに千葉一族の歴史をみてきましたが、今回は現代に活躍する千葉一族の皆さんに話を聞きました。



祖先は「平将頼」

地元に残る妙見信仰

宮城県議会議長　千葉　正美

宮城県東和町出身の千葉正美さん。宮城県の県議会のトップとして活躍しています。お会いすると卓速、私に「系図」の写しを下さいました。今回、初めての公開ということで御本家から借りてきていただいたということでした。

千葉正美氏

月二九曜紋

分家は三柏紋を使用

【先祖の歴史から】

さて、系図は、「平将頼（将門の弟）」を祖先にして、千葉常胤に結んでいました。将門信仰という点では非常に珍しい系図でした。

葛西清信の家臣として（現東和町）に落ち着き、「奥州奉行」に任じられたとあります。この時から葛西家家臣として活動し、代々気仙郡猪田城主になったようです。しかし天正十九（一五九〇）年の奥州仕置の時の当主は政胤、この頃に浪人となりましたが、その時代については、はっきり記載されておりません。元胤の時に家臣百名とともに登米郡嵯峨立村二良根郷（現東和町）に落ち着き、肝煎（村役人）となり、代々世襲したことが書かれていました。

【千葉家の信仰】

そこで東和町の二良根（にろね）の里について、また、二良根には、ほとんど千葉姓しかなく、このうち、家の屋根裏で白蛇を見たという家が何軒かあるそうで妙見信仰が残っているようです。

【千葉とのかかわり】

「宮城県の初代公選知事は千葉三郎さんで千葉の出身ですよ」と意外なお話を聞きました。千葉三郎さんは、茂原の眼科医で長生高校の創立者・千葉弥次馬氏の弟です。後に宮城から千葉に選挙区を移して、鳩山内閣の労働大臣を就任しました。まさしく宮城と千葉は深くつながりがあるとが解りました。

別れ際に「千葉県に行って先祖参りをしたいですよ。いずれお伺いします」と望郷精神が垣間見えました。

【経歴】

昭和12年宮城県東和町生まれ。長谷川峻代議士の秘書になり、県議に当選、宮城県議長に就任。

佐沼高校時代の恩師で勇谷伊達（千葉）家旧臣の佐々木茂槇先生からお話を伺うと「千葉君は、毎朝、新聞配達を終えてから、往復二時間の道のりを自転車で通っていました。

今回の取材で

取材にあたって、東北千葉家の方々を中心に各方面からご協力を頂きました。この場を借りてあつく御礼申し上げます。

宮城では、千葉正美議長、佐々木茂槇師（勇谷伊達家家臣末裔）、坂本紀男氏（常胤三男武石胤盛の末裔）、内出正則氏（宮城県議会事務局）。

岩手では、千葉浩一副知事、千葉隆典氏（東北千葉氏末裔）、吉田秀岩手県議、平野正氏、小原勝氏（岩手県秘書課）。（千葉氏研究家　鈴木佐）

長坂千葉家の末裔

自宅の側にゆかりの木

岩手県副知事　千葉　浩一

宮城県と岩手県は、千葉姓が多い県ですが岩手県政の副知事をつとめるのは、千葉家末裔・千葉浩一さん。

「副知事は、千葉常胤の末裔ですね」と伺うと「たいしたことないですよ」と恐縮されました。

【経歴】

昭和11年盛岡市出身。先祖は岩手県衣川村の出身。大学卒業後、岩手県庁に入庁。電力局をかわきりに地方課ほか県庁各課を歴任。副知事に就任、現在に至る。

【先祖の歴史から】

いただいた資料をもとに整理すると、奥州藤原氏滅亡後、葛西一族が統治します。この奥州総奉行・葛西清重が奥州平泉に赴任すると、千葉常胤の七男・千葉頼胤が清重の家臣として、岩手県南地方に移住し、特に唐梅館（長坂城・現在の岩手県東山町）に住した長坂千葉家の末裔と伝承されます。

そして、天正十九（一五九〇）年の奥州仕置によって葛西家は滅亡。長坂千葉家も同時に滅亡し、衣川村下清水（しもすず）に移住し、帰農したそうです。その後、名家ゆえをもって下衣川村の「肝煎」に任じられることになったそうです。

衣川村の代々の肝煎であった千葉家は近代に入り、衣川村長を二代つとめ、千葉胤次は県議会議員になりました。

【千葉とのかかわり】

「私が住んでいる自宅の側には千葉葛西ゆかりのサイカチの木もあるんですよ。現在、岩手放送になっていますがかつては南部藩士・葛西家の屋敷でした。私も葛西家に昭和天皇がお泊りになったことを覚えています」副知事から教えて頂き帰りに寄ってみました。大きなサイカチの木で葛西家の灯篭が残っていました。

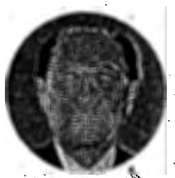
「私が東北人の典型としてあげられる人は、米内光政海軍大将でしょうね。熟慮断行の人で平和主義を推進し、昭和天皇から信頼をうけた人です。そういえば、米内大将とともに終戦を導いたのは千葉県出身の鈴木貫太郎海軍大将ですね、千葉とは関係が深いですね」。

退出前に千葉市の広報紙をお渡しすると千葉一族が広報紙で大きくとりあげていることに大きく驚かれました。

「仕事が一区切りついたら、ルーツ捜しに千葉にもいってみたいですね」と語っていただきました。


旧葛西家屋敷跡のサイカチの木（後ろは岩手放送）

三つ柏紋


千葉浩一氏

月星紋

戦国期の邦胤が祖先

皇室が千葉家を意識

千葉県商工会議所連合会会長　千葉　滋胤

現在、情報通信分野で活躍している㈱ケーブルネットワーク社長・千葉滋胤さん。昨年秋から千葉県商工会議所連合会長に就任しながら、千葉氏の文化歴史イベントや各県との交流活動も行っていらっしゃいます。

【経歴】

昭和7年千葉市出身。父は県副出納長を歴任した幾胤氏。大学卒業後、千葉銀行入行。広報課長ほか内各課に歴任。千葉銀行副頭取に就任。退任後、㈱ケーブルネットワーク千葉代表取締役。千葉商工会議所会頭就任。

【先祖の歴史から】

千葉滋胤家の系図を整理すると、下総千葉家の戦国時代の当主・邦胤が出てきます。彼は、北条氏政の娘婿で北条氏の支配をうけていました。その後を継承したのが重胤です。その弟には、加曽利冠者胤衡という人物がいたとされます。胤衡は、下総森山城にいて、海上胤富と戦ったそうです。

月星紋


千葉滋胤氏

家分家・石毛家の守護で養育されたようです。

しかし、小田原合戦により千葉家は滅亡します。この時胤衡は、石毛家を伴い、海上郡倉橋村に隠居します。森山城にあった「榎の木」と「妙見菩薩像」を倉橋村に持参し、植えたそうです。

しばらくは、徳川政権からの千葉家狩りが収まって、三代将軍家光の頃、会長は若き日、千葉家の姓を嫌ったといいます。それは戦時中のこと、また学生時代です。軍事用で訓練していた時将校から「賊軍の子孫め」と辱めを受けたようです。これは、戦前に蔓延していた「皇国史観」のせいですが、南朝から北朝に転身した千葉貞胤をさしたそうです。滋胤さんは、この事でたいへん苦労したそうですがこの経験から、いかなる苦難も乗り越えていったようです。

また、滋胤さんの話からは、「皇室では千葉家を意識していた」ことがわかりました。父幾胤さんは千葉県庁に入庁し初代知事・川口為之助の秘書になります。

川口知事は、食料品種改良の関係で、御殿場に静養していた「秩父宮雍仁親王」を訪問したことがありました。この時秘書の幾胤さんは滋胤少年をひきつれ、当時は珍しいピーマンを持参しました。応対したのは、勢津子妃殿下でした。

妃殿下は、川口知事から幾胤さんを「彼は千葉何軒かの旗本の倉橋領の代官に任じられたようです。滋胤さんの父・幾胤さんはこの倉橋村の千葉家（現在は千葉正胤さんが継いでいます）から出ました。

【皇室とのかかわり】

介常胤の末裔です」と紹介しました。妃殿下は驚きになられて「ま、千葉様は常胤公の末裔ですか、千葉には岡飯田という地がございますか」とご下問があったそうです。突然の質問に一同驚きましたが妃殿下の「古今伝授、和歌の家・東氏の居城・小見川町岡飯田に行ってみたい」ということでわかったそうです。

皇室では和歌を今なお重要視していますが、この逸話から皇室では「千葉家の歌学・和歌」を大事になされていることがわかりました。

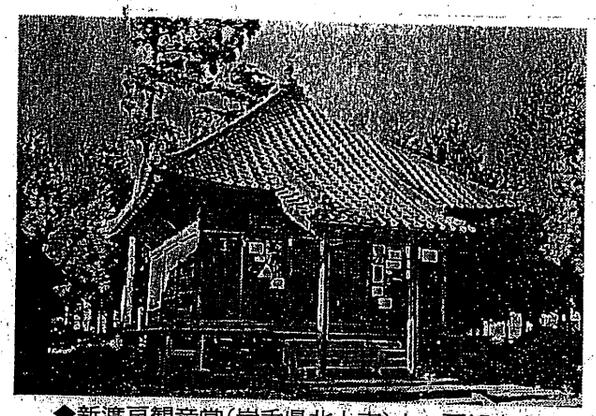
【これからの抱負を語る】

これからは、千葉もアイデンティティが必要です。首都圏という中にあって、東京の属国という観念を捨て、千葉自身の良さというものを全面に出すことが大事ですね。学問でいえば「千葉学」でしょうか。産業・物産でいえば「千葉ブランド」でしょうか。

二十一世紀、千葉県から情報や産業・文化を発信することになるまでに私も充分に貢献していきたいと思っています。また、千葉家と関係がある市町村にも回って交流を深めていきたいです。

＊次回の千葉氏探訪は3月22日（木）です。

奥州の名族 新渡戸氏(二)



◆新渡戸観音堂(岩手県北上市)十一面観音を祀る。新渡戸家が下総よりもたらし、建立したもの。妙見を祀る。なお、千葉寺からから下野国新渡戸山に移り、北上市に建立された

新田開発で成功収める伝



◆新渡戸一族の墓所(岩手県花巻市の雄山寺)
南部藩士にとりたてられた新渡戸春治(ときはる)以下の墓所である。春治は、豊臣秀吉に滅ぼされたが南部藩家老・北信愛(松斎)に信任を受け、南部藩に仕えた新渡戸家の中興の祖である

子の常以の代で、百五十石を召し上げられ、以後、家禄は五十石となった。

また、維民の代には藩の方針に反対したため二十五石に減らされた。この時、維民の長男伝(つとう)は、一時、商人となり、材木商として成功した。やがて、維民・伝の父子は武士に復れる事となった。

この伝を助けたのは、盛岡新渡戸氏の本家であった新渡戸丹波であった。盛岡新渡戸氏の本家は五百石を知行した南部藩の重臣で、丹波は家老を務めていたが、伝の才能を見ぬき様々な援助を行ったという。

花巻新渡戸氏が新田の開発を本格的に行なったのは伝の代からである。伝は晩年の弘化四年(一八四七)より、和賀郡江釣子村などに新田の開発を行ったが、安政二年(一八五五)四月、伝・十次郎の父子は当時不毛の地であった三本平(現、十和田市)の開発の願書を提出し、許可を得ると同年十月四日、工事に着手し、同六年(一八五九)五月四日、上水の導水に成功を収めて工事を終了した。この伝の孫が、国際交流の父といわれた稲造である。

奥州の名族 新渡戸氏(一)

新渡戸氏は、千葉介胤正の子堺常秀を始祖とする奥州の名家で、戦国期、和賀郡を支配した多田薩摩守義春の重臣として活躍した。名字の地であった新渡戸は、下野国新渡戸(現在の埼玉県真岡市や二宮町)といわれている。



◆新渡戸家発祥の地、現在の栃木県二宮町水戸部を流れる小貝川

千葉介胤正の子 堺常秀が始祖

桓武平氏を出自とし、堺常秀を始祖とする新渡戸氏は、千葉介胤正の子孫であるといわれる。

常秀の子秀胤は、宝治合戦に巻き込まれ、幕府より追討されて一族は上総国の大柳館で滅亡する。

しかし、『吾妻鏡』による年(一二四七)に起こった、下野国の豪族が結びつく何らかの可能性は留保すべきであると考えられる。

さて、新渡戸を本貫地とした新渡戸氏は、室町時代、と秀胤の子泰秀の幼い二子は、秀胤討伐軍の将であった東胤行の孫であった事が鎌倉公方足利持氏に属したため永享の乱で持氏一族が滅亡すると下野国の新渡戸を追われ、陸奥国元良郡高原に移住した。しかし、ここも葛西氏によって攻められると、伊沢郡西根に移り、更に、和賀郡の多田氏を頼って移住し、同郡江釣子を所領としていたが、多田氏が豊臣秀吉による奥州仕置によって滅亡すると、所領を失い、浪々の身となった三浦氏と姻戚関係を結び、評定衆に補任されて、勢力を振るったが、宝治元年、下野国の豪族が結びつく何らかの可能性は留保すべきであると考えられる。

さて、新渡戸を本貫地とした新渡戸氏は、室町時代、と秀胤の子泰秀の幼い二子は、秀胤討伐軍の将であった東胤行の孫であった事が鎌倉公方足利持氏に属したため永享の乱で持氏一族が滅亡すると下野国の新渡戸を追われ、陸奥国元良郡高原に移住した。しかし、ここも葛西氏によって攻められると、伊沢郡西根に移り、更に、和賀郡の多田氏を頼って移住し、同郡江釣子を所領としていたが、多田氏が豊臣秀吉による奥州仕置によって滅亡すると、所領を失い、浪々の身となった三浦氏と姻戚関係を結ないとしても、泰秀の二人の遺児が助命されているとび、評定衆に補任されて、勢力を振るったが、宝治元と新渡戸を本貫地とする

を討伐し、この恩賞として新渡戸・高岡・青谷の三郷を賜ったとされる。

その後、堺常秀の子秀胤は、幕府の有力御家人であれば、確たる資料が確認されないとしても、泰秀の二人の遺児が助命されているとした。

戸氏に上総千葉氏の遺児を祖とする伝承があるとすれ

下野を本貫地とする新渡

ら助命されている。



◆盛岡藩士・新渡戸家邸跡にたつ新渡戸稲造像(岩手県盛岡市)